

優秀賞

髪でつながれ親切の輪

福岡県 津屋崎小学校 五年

諫元 妃莉

私の身長は130センチメートル。髪の毛の長さも130センチメートル。「ラプンツェル」の長い髪にあこがれて、生まれて一度も切ったことのない髪は身長と同じ長さ、床につくまでのびました。

あるときテレビ番組で、子どもの頃から髪の毛が抜けてしまう病気があること、そんな子たちのために髪を寄附できるヘアドネーションというシステムがあることを知りました。寄附には31センチメートル以上の長さが必要だけれど、私ならできるな、と思った記憶があります。

4年生の頃に、『31センチの約束』という本を読みました。本の主人公は友達が白血病になったことをきっかけに、髪をのぼしプレゼントすることを決めたのです。バレーボールの強化メンバーになれなくても、周りからいじめられても、友達のために自分の髪をのぼして贈ることをつらぬきました。そんな姿に感動し、私も髪を寄附しようという思いが強くはつきりしました。

10年間ものぼし続けてきた髪です。三つ編みを何度か折り曲げてまとめていたので、水泳帽子が入らず困ったり、友達から「変な髪型だね。」と言われて悲しかったこともありました。髪を洗うのも、乾かすのも時間がかかり、自転車に髪がからまって切れたこともあり、とても大変でした。

そんな思いをしながら大切にのぼしてきた髪を、誰かのためにぼさきり切ってしまうなんて考えられませんでした。昨年、「小さな親切」作文を書いたことも、髪を寄附を決心した理由の一つでした。家族に対して小さな親切ができたことをきっかけに、周りの人に対しても親切ができる人になりたい、と作文に書きました。

私が寄附した髪で、病気で困っている世界の誰かを笑顔にできるなんて、想像しただけでうれしくなります。これは、ものすごく大きな親切に違いない、とも思いました。

どうやって髪を寄附するのか。どんな人がウィッグを必要としているのか。ウィッグができあがるまでの工程など、たくさん調べて一冊のノートにまとめました。ヘアドネーションのことを勉強していく中で、私のおばあちゃんも白血病で髪を失い、辛い闘病生活を送ってきたこともわかりました。気持ちがわかるおばあちゃんだからこそ、髪を寄附するのは勇気があることなのに、良く決心したとほめてくれました。涙が出そうなくらい、うれしかったです。

髪を切る日、テレビの取材を受けました。一つのウィッグを作るのに、20人以上の髪が必要だとわかったからです。私がテレビでヘアドネーションを知ったように、取材を受けることで、髪を寄附するという親切の輪が広がってくれるといいな、と思いました。

映像は一生残るし、批判されることも多い。辛い思いをするかもしれない覚悟もしての決断でしたので、迷いはありませんでした。髪を寄附した様子は「YouTube」でも配信され、今では100万回以上の再生数。この映像を見てくれた人たちが、きっと何かの形で親切の輪をつなげてくれて、大きな大きな親切の輪になってくれることを信じています。